

明治大学大学院文学研究科

2024年度

博士学位請求論文

(要約)

簡略式 TAE の開発に関する研究

—自己探索及びキャリア選択の支援法として—

A Study on the Development of a Simplified

TAE (Thinking at the Edge) Method

—A Supportive Approach for Self-

Exploration and Career Decision-Making—

学位請求者 臨床人間学専攻

山下 佳久

はじめに

TAE(Thinking At the Edge)とは、何か言いたいけれど最初は漠然とした身体を感じを新しい言葉で表現するための方法である。これは Gendlin(2004a, b)によって考案された理論構築法及び概念生成法である。Gendlin (2004b)は優れた詩人や哲学者、科学者たちは、TAE を自ずと実践してきたとしている。TAE の手順の中には、日常的な仕方での公共言語の使用の壁を超えてものを考えるための工夫が組み込まれている。TAE を用いて独自の仕方言葉を使用することで、新たな考えの視点や展開を生み出すことにつながると考えられる。筆者自身、TAE の方法を用いて自身の生き方を吟味することを通して、自分がいかに生きていけばよいのか明らかになることがあった。この時の体験をもとに TAE を心理的援助に生かす研究を考えはじめた。

しかし、理論構築を目的に開発された TAE の 14 ステップ全てを自己探索やキャリア探索の支援のための面接でそのまま用いると長時間にも及んでしまう。TAE の 14 ステップは煩雑であり活用することが難しい。そのために本研究では、TAE を用いた自己探索及びキャリア選択の支援法の開発を試みた。

論文は、5部構成となっている。第Ⅰ部(第1章～第3章)は国内外における TAE 研究を概観する中で、TAE を自己探索及びキャリア選択の支援の方法として適用するための課題を明らかにした。第Ⅱ部(第4章から第6章)では、第Ⅰ部において明らかとなった課題を検討するための研究方法を示した。第Ⅲ部(第7章から第10章)では簡略式 TAE (自己探索用)の試行版、第Ⅳ部(第11章から第13章)では簡略式 TAE (キャリア用)の試行版を実施した TAE セッションの記録の検討を行った。第Ⅴ部(第14章から第15章)では総括を示した。

以下、論文の目次を記載する。

目次

第Ⅰ部 TAE 研究における動向と課題について

第1章 序論

第1節 TAE について

第2節 オリジナル TAE の 14 ステップ

第3節 TAE の特徴的なステップ

第2章 先行研究

第1節 文献検索の方法

第2節 国内外における TAE 研究の動向

第3節 TAE を用いた心理的援助と TAE 研究の今後の展望

第3章 本研究における目的と構成

第1節 本研究の目的

第2節 本研究の構成

第Ⅱ部 本研究における方法論

第4章 トライアルセッションの検討の意味

第5章 質的研究の採用

第1節 質的研究の説明

第2節 分析手続き

第6章 面接の方法

第Ⅲ部 簡略式 TAE(自己探索用) 試行版の開発に関する研究

第7章 簡略式 TAE(自己探索用) 試行版の作成の手続き

第1節 本章の目的

第2節 簡略式 TAE(自己探索用) 試行版作成の手続き

第3節 簡略式 TAE(自己探索用) 試行版の内容

第8章 簡略式 TAE(自己探索用) 試行版を用いたトライアルセッションに関する研究

第1節 本章の目的

第2節 方法

第3節 結果と考察

第4節 本章の意義と今後の展望

第9章 TAE セッション過程のモデル生成に関する研究(その1)ーセッション過程の記録の質的分析を中心にー

第1節 本章の目的

第2節 方法

第3節 研究過程と結果

第4節 全体的考察と今後の展望

第10章 TAE セッション過程のモデル生成に関する研究(その2)ー振り返りインタビューの質的分析を中心にー

第1節 本章の目的

第2節 方法

第3節 研究過程と結果

第4節 全体的考察と今後の展望

第Ⅳ部 簡略式 TAE(キャリア用) 試行版の開発に関する研究

第11章 簡略式 TAE(キャリア用) 試行版の作成の手続き

第1節 本章の目的

第2節 簡略式 TAE(キャリア用) 試行版作成の手続き

第3節 簡略式 TAE(キャリア用) 試行版の内容

第12章 簡略式 TAE（キャリア用）試行版を用いた大学生のキャリア選択に関する研究— 進路未決定の大学生に対する実践事例の検討—

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果と考察

第4節 まとめと今後の展望

第13章 簡略式 TAE（キャリア用）試行版が与える大学生の捉え直しの過程について— 質的研究による過程モデルの生成—

第1節 目的

第2節 方法

第3節 研究過程と結果

第4節 全体的考察と今後の展望

第V部 総括

第14章 総合的考察

第1節 簡略式 TAE（自己探索用・キャリア用）試行版の利点

第2節 TAE セッションにおける TAE 実施者体験の検討

第3節 ガイドの関わりによる TAE 実施者の体験の過程の変化

第15章 本研究の課題と展望

第1節 本研究の課題

第2節 今後の展望

引用文献

次に、目次に沿って論文を概説する。

第I部 TAE 研究における動向と課題について

第1章 序論

TAE は人々の生き方の停滞を打破する上で役立つと考えられる。人々は普段、日常的に使われる馴染みのある言葉を使って、自分自身の心境を言い表そうとするが、じっくりくる言葉を見つけることが難しい。それゆえに思考が行き詰り、日々の生活が停滞してしまっていると考えられる。そうした人々は、従来使われる慣用的な言葉やイメージに囚われているために、自身の気持ちを言い表す言葉を見つけることが難しいのではないか。例えば「あるがまま」というイメージ通りに生きることに囚われ、こだわるあまりに、かえって自分らしく生きることができなくなることが考えられる。TAE はこのような慣用的な言葉の囚われから脱して、新たに言葉を作り直したり、定義し直したりする。TAE には個人が言い表したい新

た言葉や文を作り出すステップが多く組み込まれている。そのステップを踏んでいくことで、これまで考え及びもしなかった固有の概念が生成される。その固有の概念がその人にとってその後の人生の“よりどころ”となることもありうる。その時、本人にとってそれまで曖昧なままに留まっていた生きる方向性のようなものが“よりどころ”として浮かび上がり、より明らかに定まっていくのである。TAEのステップを踏むことで、本人にとって“よりどころ”となるような固有の概念が生成される背景には、体験過程とシンボルとの相互作用(Gendlin, 1962 筒井訳, 1993, p162)が生じていると考えられる。体験過程とは個人の内側で常に流れている体験の流れのことであり、そこに直接意識を向けるならば、身体で漠然と感じられるフェルトセンスが生じる。体験過程を何かしらの言葉で指し示すことをシンボル化と呼び、体験のプロセスは体験過程とシンボルの間を相互作用しながら前進する。TAEのステップを踏むことで、本人にとって“よりどころ”となるような固有の概念が生成される。そして今後の生き方が定まっていく時にはシンボルとの相互作用によって、ある面で停滞していた体験過程が前進的に展開(Gendlin, 1964 池見・村瀬訳 1999)していくのだと考えられる。

しかし、理論構築を目的に開発されたTAEの14ステップ全てを自己探索やキャリア探索の支援のための面接でそのまま用いると長時間にも及んでしまう。TAEの14ステップは煩雑であり活用することが難しい。

このことから本研究ではTAEの簡略版(自己探索版)及び(キャリア支援版)を作成し、簡略化されたTAEを用いて行ったトライアルセッションの実例や、その振り返りインタビューの記録を詳細に検討し、TAEのセッションにおいて実施者はどのような体験をするのか、またそれを支援するためにガイドはどのような働きかけを行う必要があるかを検討する。

ところでGendlin(2004b 村里訳 2004b)が考えたオリジナルのTAEは14のステップから成り立っており、3つのパートに分かれている。

パート1はステップ1から5までである。フェルトセンスから感覚的に言葉を選び、その言葉の意味感覚の全体と核心を独創的な言葉または文によって把握する。TAEは言葉にすることはできないが感覚的に「知っている」ところから始める。その表現したい事柄のフェルトセンスに触れ、自分なりの言葉で書き出そうとする。そこから核となる言葉(キーワード)を拾い上げ、その言葉の辞書的な意味と、その辞書的な意味では言い表すことができない、自分が本当に言いたい自分独自の意味との違いに注意を向けるなどを行う。これによって、フェルトセンスと言葉との間を相互に意識を傾けながら考えようとする。

パート2はステップ6から9までである。パート2では、パート1で言葉にした事柄を踏まえて、フェルトセンスを感じられた具体例を検討する。感覚的に関連があると感じられる具体例をあげ、それぞれが持つ豊かで詳細な意味感覚からそこに暗に含まれている一般的なパターンや構造を取り出そうとする。これによって、そのフェルトセンスの前進的な展開の可能性をさらに探究することができる。フェルトセンスからさまざまな具体例を集めたら、今度はフェルトセンスから生じた具体例とパターン同士を交差させる。つまりある側面を他の側面の視点から捉えるよう試みる。それによって、一つの側面だけでは見えなかった

ことが浮かび上がる。ちなみに、パターンとは経験に関するフェルトセンスから導き出され、その他の経験においても繰り返し現れるシンボル化である。また交差とは無関係な事柄やそのフェルトセンスどうしを相互に関係付けることで、新たな意味感覚が生じるのである。

パート3はステップ10から14までである。ステップ3では、論理以上の意味感覚を大切にしながら、色々な言葉を組み合わせてみる。出てくる表現が自分にとって何か意味があると感じられるのであれば、それを論理的に結び付けたり整理したりする作業はひとまず脇に置き、その意味感覚を大事にしながら、色々な言葉を組み合わせてみる。このように言葉どうしの連関によって、展開した意味感覚を最後に短い文章によって要約する。要約された文章が、言葉どうしの連関によって構造化された理論である。その理論を自分の専門外の広い領域に適用させることが可能となる。自分の理論をその分野で展開し応用させるステップ14を行うには、何年もかかる(Gendlin, 2004b 村里訳 2004)。理論を自分の専門分野に適用することで、新たな問題提起につながる。理論から、どのような理解が導き出されるか、この理論に必要なことがさらに何であるのかを考えることは果てしないことと考えられる。

TAEを用いることは、これからの人生をどのように生きるか今後の展望を描くことにつながると思われる。TAEを援助的に用いることを検討するためには、TAEを用いることで内省し、自身がこれからいかに生きていけばよいのか自己探索を行っている研究を探ることが必要である。そのために国内外のTAE研究の動向と、今後の研究の方向性と課題について探ろうと考えた。

第2章 先行研究

第2章ではTAEを自己探索やキャリア選択に活用している国内外の研究に焦点を当てて概観し、TAEを自己探索やキャリア選択の支援の方法として用いるに当たっての課題を明らかとした。TAE研究の動向を探るために、国立情報学研究所による文献データベースであるCinii(<https://ci.nii.ac.jp>)やGoogle scholar(<https://scholar.google.co.jp>)を用いて、“TAE”あるいは“Thinking At the Edge, Gendlin”というキーワードを入力し、検索を行った。その結果、TAEを用いている、またはテーマとして書かれている論文として40件の該当があった。こうした論文の他に、さらにフォーカシングと体験過程療法のための学術誌であるFolioに掲載されている論文、TAEに関する著作や博士論文、修士論文も文献研究の対象とした。著作や博士論文は、収録されている研究ごとに一つの件数として数え、これらの研究を全て合わせた結果、合計67件となった。その後、用途や活用されている領域ごとに分類を行い、TAEを援助法として用いる上で示唆する研究はないか、その動向と展望を探ることとした。

国内外におけるTAE研究の動向として、TAE研究は海外よりも日本での文献の数が多く見られていることが明らかとなった。とりわけTAEを質的研究に応用して心理臨床家や看護師、保健師といった対人援助職や、教育者の専門性を探る研究が多く見られた。こうしたTAE

を用いた質的研究が見られるようになったのは、得丸(2010, 2016)がTAEを質的研究に応用した功績が大きいと言えよう。これらの研究の中でもTAEを用いることで自己探索や自己成長に活用している研究に焦点を当てることで次のような5点の傾向があることが明らかとなった。(1)TAEをキャリア選択やキャリア向上への応用に関する実践、(2)内省法としての自身の体験の振り返りの研究、(3)言葉の意味合いが転換し生を前に進めること、(4)エッジから言葉を紡ぎ出すことによる前進、(5)コーチングのストレスマネジメントにTAEを活かす。しかしこれら5点は、TAEを用いることによる心理的変化の過程を捉えることを目的としたものではなく、実際に個人がどのような過程を経て心理的変化が生じているのか明らかにされていない。またTAEにおけるガイドの工夫として、三沢(2019)はTAE実施者を尊重し、適度な間を取って話を深めることの重要性を指摘していたが、ガイドが実際にどのように働きかけているのかその実態は明らかにされていない。

またTAEを援助法として用いていく上で、次の得丸(2020)とProß(2012b)の指摘が重要と考えられる。得丸(2020)は、TAEが全体イメージがつかみにくく各手順の機能がわかりにくいこと、手順が14ステップあり煩雑なことについて言及している。またProß(2012b)はTAEがフォーカシングよりも普及していないのは、TAEの過程において理論を発展させようとする当初の意図が、TAEの普及を妨げており、そうした過程が複雑であることを挙げている。実際の心理面接やキャリア相談においてTAEを用いることを想定した場合、面接は50分枠で実施されることが多く、TAEの14ステップすべて実施することは難しいであろう。

これらのことからTAEを心理的援助法として用いる場合、次の3点が課題であると考えられた。(1)オリジナルのTAEは煩雑であるため、簡略式のTAEを作成する必要があること、(2)簡略式TAE(自己探索用)及び(キャリア用)の試行版を用いてトライアルセッションを実施し、その記録を詳細に検討することで、TAE実施者がどのような体験をしているのかを明らかにする必要があること、(3)TAEセッションにおいてはガイドの働きかけが大きな意味を持つので、簡略式TAE(自己探索用)及び(キャリア用)の試行版によるトライアルセッションとその振り返りインタビューの記録を詳細に検討することで、TAE実施者が前進的な展開を体験しうるにはガイドによるどのような働きかけが有益かを明らかにする必要があること。

第3章 本研究の目的と構成

第I部においてはTAE研究の文献レビューの中で明らかとなった今後の研究の方向性、(1)TAEをより使いやすいものにするためにはTAEを簡略化するように工夫すること、(2)簡略式のTAEを用いることで対象者はどのような体験をするのかを検討すること、(3)C1となるTAE実施者が前進的な展開を体験しうるには、どのようなガイドの働きかけが有益か検討することの3点が明らかとなった。これらを踏まえて、本研究はTAEを用いた自己探索及びキャリア選択支援の支援法の開発を試みることを目指す。そのためにまずは、アナログ研究に基づくトライアルセッションや、質的分析によってTAEを援助法として活用することが可能か検討することが必要である。

このことから本研究では次の4点を目的とする。

(1) TAEを自己探索及びキャリア選択の支援の方法として適用するために、簡略式TAE(自己探索用)及び簡略式TAE(キャリア用)の試行版を作成する。この両者の有効性を検討しその結果にもとづいて改訂するために、(2)簡略式TAE(自己探索用)及び簡略式TAE(キャリア用)の試行版を用いた個人面接のトライアルセッション(以下TAEセッション)を行い、TAEセッションにおいて研究参加者であるTAE実施者がどのような体験をしているのかを検討する。さらに(3)TAE実施者が前進的な展開を体験しうるには、簡略式TAE(自己探索用)試行版のセッションにおいて、ガイドによるどのような働きかけを行うことが有益か検討する。(4)以上の結果に基づき、簡略式TAE(自己探索用)試行版及び簡略式TAE(キャリア用)試行版の課題を発見し、その改訂につなげる。

本論文の構成は、第I部(第1章から第3章)、第II部(第4章から第6章)、第III部(第7章から第10章)、第IV部(第11章から第13章)、第V部(第14章から第15章)の5つから成る。

第I部では国内外におけるTAE研究を概観する中で、TAEを自己探索及びキャリア選択の支援の方法として適用するには以下の課題があることを明らかにした。(1)オリジナルのTAE(Gendlin, 2004a, b)は煩雑であるため、簡略式のTAEを作成する必要性があること、(2)簡略式TAE(自己探索用)及び(キャリア用)の試行版を用いてトライアルセッションを実施し、その記録を詳細に検討することで、TAE実施者がどのような体験をしているのかを明らかにすること、(3)TAEセッションにおいてはガイドの働きかけが大きな意味を持つので、簡略式TAE(自己探索用)及び(キャリア用)の試行版によるトライアルセッションとその振り返りインタビューの記録を詳細に検討することで、TAE実施者が前進的な展開を体験しうるにはガイドによるどのような働きかけが有益かを明らかにする必要があること。

第II部では、これらの課題を検討するための研究方法を示した。

第III部では簡略式TAE(自己探索用)の試行版、第IV部では簡略式TAE(キャリア用)の試行版を実施したTAEセッションの記録の検討を行った。

第V部では総括を示した。

第II部 本研究における方法論

第4章 トライアルセッションの検討の意味

TAEは元々、理論構築のためにGendlinが開発したものであり、心理的援助法として活用するには、本研究において開発される簡略式TAE(自己探索用・キャリア用)試行版のどのような側面が心理援助的であるかを検討することが必要である。そのために本研究では、まずは簡略式TAEを用いたTAEトライアルセッションを実施し簡略式TAE(自己探索用・キャリア用)試行版を心理援助的に行うことでどのような体験が起こるのかを検討することが必要と考えられた。

第5章 質的研究の採用

TAEセッションにおけるTAE実施者の体験について検討することやTAEトライアルセッションにおけるガイドによる働きかけを検討するための方法として、セッションの記録及びそれに伴って行われた振り返りインタビューの逐語記録を詳細に分析することを示した。そこでグラウンデッドセオリーアプローチ(GTA) (Glaser & Strauss, 1967 後藤他訳 1996 ; Strauss & Corbin, 1990 操・森岡訳 2004)と解釈学的現象学的分析(IPA) (Smith & Osborn, 2008), Smith(1995)の質的分析に基づく分析を本研究において採用した。

第6章 面接の方法

本研究の調査は面接に基づくものである。簡略式TAE(自己探索用・キャリア用)試行版を実施するトライアルセッションと、その振り返りインタビューのために面接を行う。

トライアルセッションでは実際に簡略式TAE(自己探索用・キャリア用)を試行することで、TAE実施者にどのような体験が起こり、その体験にどのような意味があるかを検討するために半構造化面接に基づくセッションを行う必要があると考えられる。簡略式TAE(自己探索用・キャリア用)試行版をガイドするための教示文を作成し、その教示文に基づきながら半構造化面接を行うものとする。

振り返りインタビューの際にも、Smith & Osborn(2008)を参考に面接ガイドを作成した。この面接ガイドに基づくことで、実際の面接では何を質問する必要があるのかを明らかにし、面接の流れを研究参加者の関心に応じて、質問の順序と内容を変更しながら行うことができる。さまざまな進め方について事前に考えておくことで、いざ面接が始まった時に、研究参加者の話を安心して聞くことができる。

第Ⅲ部 簡略式TAE(自己探索用)試行版の開発に関する研究

第7章 簡略式TAE(自己探索用)試行版の作成の手続き

第7章では、簡略式TAE(自己探索用)の試行版をどのようにして作成したかを述べた。得丸(2020)はTAEは全体イメージがつかみにくく各手順の機能がわかりにくいこと、手順が14ステップあり煩雑なことについて言及している。またProß(2012b)はTAEがフォーカシングよりも普及していないのは、TAEの過程で理論を発展させようとする当初の意図が、TAEの普及を妨げていることと、過程が複雑であることを挙げている。

GendlinのオリジナルTAEをそのまま自己探索やキャリア選択の援助の方法として用いることは無理があり、新たに自己探索やキャリア選択の用途に絞って手を加えた簡略式TAE(自己探索用・キャリア用)試行版を作成する必要があると考えられた。このことから本章では、簡略式TAE(自己探索用)の試行版をまずは作成する。簡略式TAE(自己探索用)試行版をどのようにして作ったか、その方法と手順、作成された簡略式TAE(自己探索用)の試行版の内容を具体的に示した。

簡略式 TAE（自己探索用）試行版の作成の手続きは(1)自己分析による検討，(2)自己探索の援助法としての TAE ステップの改訂，(3)改訂された簡略式 TAE(自己探索用)試行版を用いた自己分析の検討，(4)簡略式 TAE(自己探索用)試行版の知人への実施，(5)フォーカシング，体験過程理論の専門家からのフィードバックといった手順から成る。

(1)自己分析の際には，“私の心理臨床家としての“よりどころとなるものは何か？”というテーマで実施し，オリジナル TAE の 14 ステップ全てを一通り行った。その結果から，オリジナル TAE を自己探索の援助法として改訂する上で何が必要か吟味・検討した。Gendlin(2004b 得丸訳 2010)のオリジナル TAE や村里(2005)，得丸(2008, 2010)を踏まえながら TAE を最初一人でガイドなしで行った。その時，2，3 週間程度の時間を要した。この結果を踏まえて，自己探索の援助方法として対面式で TAE を用いるにはどのような手続きが必要かを考え，ステップの教示文を Gendlin(2004a 村里訳 2004；2004b 村里訳 2004)と得丸(2008, 2010)を参考に考えて工夫した。こうした手続きにより，(2)自己探索の援助法としての TAE ステップの改訂を行った。

次に(3)改訂された簡略式 TAE(自己探索用)試行版を用いた自己分析の検討を行った。その時の実施時間は 2 時間程度の時間を要し，オリジナル TAE の 14 ステップを実施したときよりも短い時間で簡略式 TAE(自己探索用)試行版を終えることが可能となった。このことから Gendlin のオリジナル TAE の簡略化が確認された。さらに(4)簡略式 TAE（自己探索用）試行版を 2 名ほどの知人に実施し，フィードバックをしてもらった。そして(5)フォーカシング，体験過程理論の専門家からのフィードバックを行ってもらい，改訂された簡略式 TAE(自己探索用)試行版が適切か検討した。最終的に簡略式 TAE(自己探索用)試行版が開発された。簡略式 TAE（自己探索用）試行版の内容と Gendlin のオリジナル TAE ステップを比較対称させたものを Table 1 にして示す。

Table 1 GendlinのTAEステップと簡略式TAE(自己探索用) 試行版ステップの対照の一覧	
Step1~14(Gendlin,2004)	簡略式TAE(自己探索用)試行版 ステップ1~10
Step1 ：フェルトセンスから幾つか言葉を思い浮かべる。	ステップ2 ：言葉にしたフェルトセンスから一文を作り、大切に感じられた部分を空所にする。その空所の部分に、何か別の言葉が当てはまらないかと考える。言葉にしたいことが通常言語の意味を超えることに気付く。 あなたが言わせなかったことを表現する文あるいは新鮮な語句を書く。
Step2 ：言葉にしたフェルトセンスから一文を作り、そこから非論理的な部分を見つける。	
Step3 ：一文から重要に感じられるキーワードを取り除き、その部分を空所にする。その空所の部分に、何か別の言葉が当てはまらないかを捉え直す。言葉にしたいことが通常の意味では言い表せないことに気付く。	
Step4 ：これらの語を使って、あなたが言わせなかったことを表現する文あるいは新鮮な語句を書く。	
step5 ：各語に言わせなかったことを、言語学的には普通ではない新しい語句を書くことによって、再び展開する。	ステップ3 ：各語に言わせなかったことを、言語学的には普通ではない新しい文を書くことによって、再び展開する。
Step6 ：側面（具体例）を集める。	ステップ4 ：側面（具体例）を集める。
Step7 ：各側面（具体例）が詳細な構造(パターン,シンボル)を与えるようにする。	ステップ5 ：各側面（具体例）が詳細な構造(パターン,シンボル)を与えるようにする。
Step8 ：各側面（具体例）を交差させる。	ステップ6 ：各側面（具体例）を交差させる。
Step9 ：自由に書く。	ステップ1 ：自由に書く
Step10 ：3つの用語を選び、それらを連結し、言葉にならない部分にも注目する。	ステップ7 ：3つの用語を選び、それらを連結し、言葉にならない部分にも注目する。
Step11 :各用語の間の本来的な関係を問う。	ステップ8 ：各用語の間の本来的な関係を問う。
Step12 :最終的な用語を選び、それらを相互に関係づける。	ステップ10 ：これらの大切に感じられた言葉を使って、一つの文にして最後に表現する。
Step13 :自分の理論を自分の分野の外に適用する。	ステップ9 ：あなたが困っていること、希望や救いに感じていることを端的に言い表してみましょう。
Step14 :自分の理論をその分野で展開し、応用する。	

第8章 簡略式TAE(自己探索用)試行版を用いたトライアルセッションに関する研究

第8章では、第7章で開発された簡略式TAE(自己探索用)の試行版を筆者の知人である30代後半の男性Aに用いて実施した。調査手続きとしては、人生において困っていることをテーマに筆者のガイドに基づきながら行った。TAEセッションの所要時間は、2時間半程度であった。

簡略式TAE(自己探索用)試行版を用いたトライアルセッション(以下TAEセッション)の記録を詳細に検討し、Aが次のような体験をしたことを明らかにした。

まずステップ1では自由に語ってもらい、その際には身体を感じてもらいながら、ガイドである筆者が人生において困っていることを尋ねた。するとAは「結婚しておらず子どもも居ないが、親よりは長生きすることが親孝行であると思っている」と話していた。次にステップ2では、ステップ1で話してもらった話の中で大切であると感じられた部分に注目してもらい、それらの語句から端的にタイトルを付けてもらった。例えばAは最初「人生と生き方、健康とお金」と話していた。ガイドがさらに話すように促すとAは「俺の生き様、自分らしく生きる道、楽しく生きたい、孤独死を防ぎたい」と言う。〈これらを一緒に考えて、1つの文にできそう?〉と尋ねると、「孤独死を防ぐ俺らしく生きる道にする」と話していた。次にこの1文から大切であると感じられた部分を空白にした文を作ってもらい、「孤独死を防ぐ()生きる道にする」といった文を作っていた。こうした空白に当てはまる言葉について尋ねると、「楽しい」、「興味を持つ」といった言葉が出てきた。この時に〈これらの言葉を辞書で調べて、自分が言い表したい言葉の意味であるかどうかを確かめる〉よう伝えた。例えば「俺らしく」はワクワク、フワフワさせる感じ、「楽しい」はふわふわさせるような感じ、「興味を持つ」はアトラクションのようなウキウキ、ドキドキ感、と話していた。

ステップ3では、これらの語句から新しい一文を作ってもらった。すると「ふわっと軽く自由に生きたい」と話していた。この「ふわっと軽く自由に生きたい」という文に関連する経験を3つ挙げてもらった。これがステップ4である。次にこれらの経験のパターン、シンボルをそれぞれ挙げてもらった。これがステップ5である。ステップ4と5の結果は、Table

	経験1	経験2	経験3
経験	中学生の頃、近所の友達がかからう人だった。他人をず〜っとネタにする。中学の頃に、その友だちとは、縁を切った。もっと自由に生きたいと思った。	会社では、ノルマノルマと言われて、ノルマを果たすために価値のない商品を客に買ってもらう。客に不利益を与えてきた。自分らしく仕事をしたい。	サークルで、部長をやってきたときに、自由にやれていた。それが俺の成功体験だった。そして、俺の理想に近かった気がする。〈どこら辺が理想だった?〉自分だけでなく、みんなも自由にできていたこと。
パターン	パターン1 捨てた。	パターン2 俺には無理で諦めた。自分の能力を自覚した。	パターン3 皆が自由にできる止まり木にしたかった。

2に記載する。

ステップ6では、ステップ4, 5で挙げた異なる経験とパターン同士を総当たりで交差させる。交差とは、言葉やシンボル間の組み合わせのことである。例えばAは経験3のサークルの部長をしていた時の体験に、経験1から生まれた「捨てた」というパターンを照らし合わせて考えると、部長として止まり木であることを大切にすあまりに、自分の他の経験を捨てたと振り返っていた。このように経験とパターンを交差させることで、様々な気づきが生じる。

ステップ7ではこれらのステップを振り返り、今身体で感じられていることを3つの言葉にして選んでもらった。すると『我を通す』、『誠実』、『肯定感の低さ』といった言葉が出てきた。ステップ8では、これらの言葉どうしを総当たりで、主語と述語の関係にして定義づけていった。例えば「誠実」とは「肯定感の低さ」であるという一文を作った際には、相手に親切でないと自分が居てはいけないと思うと振り返っていた。このように他人からすれば無関係な言葉どうしに感じられるが、Aにとっては同じフェルトセンスから生まれた言葉どうしであることから、何かしら意味のある関連性が生じる。

ステップ9ではこれらのステップからAが困っていること、希望や救いに感じられていることを一つの文にして書いてもらった。困っている文として『自己保身のジレンマが誠実である』、希望や救いに感じられている文としては『新たな価値観はお金である』といった文が出てきた。『自己保身のジレンマが誠実である』という一文は、Aとガイドとの次のようなやり取りによって生じていた。

ガイドはAの話聞き、「性を変えられない蠍」とでもいうようなフェルトセンスが感じられ、Aが「矛盾した誠実さ」を内に秘めていることを感じた。またそうした誠実さは、自己肯定感が低い自分自身を守るためのものであると考えた。Aにとっての誠実さとは、「自己保身的なものなのかな？」という漠然とした印象を抱き、この時Aに伝え返したい言葉を次々と思いつかべていた。例えば、誠実、自己保身、ジレンマ、自己矛盾といった言葉が想起された。筆者はこれらの言葉を、蠍のようなフェルトセンスをじっくりと感じながら、相互に交差させていった。すると『自己保身のジレンマが誠実である』という一文が浮かんできた。筆者自身のフェルトセンスにじっくり来て、おそらくAのフェルトセンスにも響くだろうと感じた。

Aに確かめるために〈『自己保身のジレンマが誠実である』という一文はじっくりくる？〉と尋ねた。すると、「そう！ピッタリだ。まさにそれだ！それがいい！」と話す。

次のステップとして、希望や救いに感じられていることから、困っていることを眺めてもらおうと、自分のやりたいことをやれる我儘な自分で居ることが必要なことと、本当の意味で他者と関わっていなかったと振り返っていた。

ステップ10ではこれまでの面接やいま感じられていることについて振り返り、幾つか言葉にしてもらった。例えば「やわらかい誠実さ」、「人との付き合い方」、「自分をさらけ出す」、「自己保身の誠実」といった言葉を思い浮かべてもらった。これらの言葉を使ってAは、最後に『誠実という殻を剥ぎ取る』といった一文を作った。

TAEセッションの振り返りの際にはAは、『自己保身のジレンマが誠実である』と言ってもらったことが良かったと話していた。抽象的な言葉なのだけれども、出てきた言葉が本質的な感じがしたとのことであった。またこれから自分がどのように他者と関わり、仕事をしていったらよいのか、その方向性を掴めたと話していた。

TAEセッションの考察として、AはTAEのステップが進むにつれて、他者に対して誠実であろうとするあまりに自己犠牲的にいつも他者に振る舞ってしまう自分自身の特徴に気付けるようになったとのことであった。また誠実さは、特に長所も何もないからこそ、他者に誠実であることが自分の長所であると捉えている。そのことが結果的に自分のためにしか生きてこなくさせていると考えられる。結果的にTAEセッションにおいて『誠実という殻を剥ぎ取る』という今後の他者との関わり方を考えている。こうした一文は、A固有の概念となる人生のよりどころ(その人が拠って立つ生きる信念)と言えよう。このように簡略式TAE(自己探索用)試行版において生成されたよりどころが、今後Aの他者との関わりを見つめていくことにつながると考えられる。

また簡略式TAE(自己探索用)試行版によって、“やわらかい誠実さ”、“人との付き合い方”、“自分をさらけ出す”“自己保身の誠実さ”といった言葉を次々と想起した。こうした言葉の想起と共に、Aは深く内省していったと考えられる。これらの言葉を相互に交差させることにより、“誠実という殻を剥ぎ取る”といった一文を見出すことができたと考えられる。TAEにおいて特徴的なのは、フェルトセンスから言葉や文が生まれることによって、矛盾した概念や言葉どうしが秩序を持って応答されることであると考えられた。こうした新たな一文を見出すことにより、ただ他者に誠実であるだけではない他者と自分をも大切にしたい生き方を見つめ直すことが可能と考えられた。

第9章 TAEセッション過程のモデル生成に関する研究(その1)

ーセッション過程の記録の質的分析を中心にー

第9章では簡略式TAE(自己探索用)の試行版を用いて、筆者の知人である30代半ばの成人女性Bに自身の生き方を振り返ってもらった。調査手続きとしては、1回の面接時間がおおよそ90分程度であり、ほぼ毎週か、隔週のペースで5回面接を行った。面接の5回目に簡略式TAE(自己探索用)試行版が終了後に、振り返りインタビューを実施し、BがTAEを実際に受けてみて、どのように感じたのかを把握した。

また30代半ばの成人女性BとのTAEセッションの記録を詳細に検討し、質的分析を行うことでBの体験の過程を検討した。またその質的分析に際し、Bの体験に基づく逐語記録を詳細に吟味し、簡略式TAEのガイドの在り方を検討した(『』はカテゴリーグループ、【】はカテゴリー、《》はサブカテゴリー)。その結果、次の3点が明らかになった。(1)TAEセッションにおいてBの内省を深めるには、その前提として、ガイドとBとの『関係づくり』や『積極的に聴く』姿勢が必要である。(2)Bの『自分に関する認識の広がり』は、ガイドによる『思考を深めるための誘い』に応えようとBが『言語化』したものの行き詰ってしまったことから『自分の限界を知る』行き詰まりの体験をし、それでも自分が感じることを『言

語化』しようとする中で生まれた。Bの体験は『自分に関する認識の拡がり』の体験や、ガイドによる『思考を深めるための誘い』に答えようと『言語化』しそれがうまくできずに『自分の限界を知る』体験を循環しながら前進的に展開していた。(3)簡略式TAE(自己探索用)試行版を行う上で、ガイドによってBの【考えていることを端的に言葉にしてもらう】、ガイドが【本当の意味を引き出す】、【生の経験に焦点を当てる】、【事柄を思い浮かべ保ったまま紐づける】といった4つの関わりが必要であることが示された。

第10章 TAEセッション過程のモデル生成に関する研究(その2)

一振り返りインタビューの質的分析を中心に

筆者の知人である30代から40代前半の5名のTAE実施者に対し簡略式TAE(自己探索用)の試行版を実施し、セッションの記録を詳細に検討した。また、TAE実施者が簡略式TAE(自己探索用)試行版を行った時の振り返りインタビューを質的分析により検討した。それによって、簡略式TAE(自己探索用)試行版を実際に行ってみた時の体験的な変化をTAE実施者の視点で捉えることが可能と考えられた。

質的分析を行った結果、次の3点が明らかとなった。(1)TAE実施者は自身の『思考を深める取り組み』によって、《言葉にすることが難しい》と感じたり、《可笑しい言葉や文による揺らぎ》が起こる。例えば、簡略式TAE(自己探索用)試行版を用いていく際に、思考の突き当たりとなるエッジまで考えようとするにより、言葉にすることが難しいと感じたり、メタファーやパラドックスを含んだ可笑しい、不思議な言葉や文を作ることによって、これまで自身が抱えていた考え方が揺らぐようになる。

こうした状態下の時に、体験過程とシンボル間において自身が不一致に感じていても別の異なるシンボルが相互作用している状態となる【自明性の揺らぎ】を体験するようになることが考えられた。

(2)『ガイドから積極的に働きかけられる』ことにより、TAE実施者は『身体を感じる』。それに伴い、じっくりと【身体を感じるに焦点を当てる】ことで、次第に【身体を感じるを凝固する】に至る。凝固化する際には、まだ言葉にすることが難しかった考えや気持ちが明確になる。この【身体を感じるを凝固化する】というのが、Aのセッションで言えば『誠実という殻を剥ぎ取る』や『自己保身のジレンマが誠実である』といった一文となる。こうした一文はその人の人生のよりどころに相当すると考えられる。

(3)TAE実施者は【身体を感じるを凝固化する】ことと【自明性の揺らぎ】を体験することで『新たな普遍へと導かれる。』またそれにより、【固有の普遍化を言葉にする】ようになる。例えば、Aで言う『誠実という殻を剥ぎ取る』であったり、『自己保身のジレンマが誠実である』といった一文として『固有の普遍化を言葉にする』ようになる。このように自分自身の『固有な体験の意味を知る』ことが、自身への気付きとなる『自分の認識に関する拡がり』へとつながる。

第IV部 簡略式TAE(キャリア用)試行版の開発に関する研究

第 11 章 簡略式 TAE (キャリア用) 試行版の開発の手続きについて

第 11 章では、簡略式 TAE(キャリア用)の試行版をどのようにして作成したかを述べた。TAE は元々、理論構築法、概念生成法を目的として Gendlin によって開発されており、キャリア選択において用いることを考える場合、Gendlin のオリジナル TAE ステップを改訂することが必要と考えられる。

簡略式 TAE (キャリア用) 試行版作成の手続きは、(1)自己分析による検討、(2)キャリア選択の援助法としての TAE ステップの改訂、(3)改訂された簡略式 TAE(キャリア用)試行版を用いた自己分析、(4)簡略式 TAE(キャリア用)試行版の大学院生への実施、(5)臨床心理学を専攻する大学教員からのフィードバックといった手順から成る。

(1)自己分析において用いる際には、“将来何になりたいと思うのか”というテーマで実施し、TAE の 9 ステップまでを一通り行った。TAE の 1 から 9 ステップまでで個人の自己理解と心理的変容を促すには十分であると考えられた。TAE の 9 ステップまでを一通り行い、その結果を吟味・検討した。その時は 1, 2 時間程度の時間を要した。Gendlin(2004b 村里訳 2004)のオリジナル TAE や村里(2005)、得丸(2008)を踏まえながら TAE をガイドなしで一人で行った。

(2)キャリア選択の援助法としての TAE ステップの改訂の際には、キャリア選択の援助の方法として、TAE を用いるにはどのような手続きが必要かを考え、TAE の簡略化と新たな教示の導入の点で、Gendlin のオリジナル TAE ステップを工夫した。

TAE の簡略化においては、得丸(2020)や Proß (2012b)が指摘するように Gendlin の TAE は煩雑であることから、実施されやすいように簡略化されるよう工夫を検討した。TAE パート 3 であるステップ 10 から 14 を省略したり、ステップ 1 から 9 までを改変し 17 ステップとした。TAE パート 3 であるステップ 10 から 14 を省略したのは、TAE の 1 から 9 ステップまでで個人の自己理解と心理的変容を促すには十分であると考えられたからである。

新たな教示の導入としては、TAE セッションを進める中で感じられる身体感と将来の夢がどのように関係するか感じながら考えてみるように、“将来、何になりたいと思うか？”“将来の夢”というテーマの教示を度々入れていたことである。

(3)改訂された簡略式 TAE(キャリア用)試行版を用いて、筆者自身が自己分析を行った。これにより、その実用性を確かめた。その結果、時間的には 1 時間程度で終わることが確かめられた。また“将来、何になりたいと思うか？”“将来の夢”といったテーマをステップ 3、ステップ 5、ステップ 17 に取り入れることにより、簡略式 TAE(キャリア用)試行版ではテーマが変わることなく、キャリア選択を促されることを検討した。

(4)改訂された簡略式 TAE (キャリア用) 試行版を臨床心理学を専攻する大学院生 5 名に試しに実施し、そのフィードバックをもらった。

(5)臨床心理学を専攻する大学教員からのフィードバックとして、フォーカシングや体験過程理論をも専門とする大学教員に報告し、改訂された点が的確であるかの意見を求めた。その結果、将来の夢に関するエッセイを最後に実施している点は良かったというフィード

バックを受けた。他にも簡略式 TAE(キャリア用) 試行版を実施する専用のワークシートを作ってみてはどうかという助言があった。もっと学生が取り組みやすいようにイラストを入れることを助言された。

最終的に簡略式 TAE(キャリア用) 試行版が開発された。簡略式 TAE (キャリア用) 試行版の内容と Gendlin のオリジナル TAE ステップを比較対照させたものを Table 3 にして示す。

Table 3 GendlinのIAEステップと簡略式IAE(キャリア用)試行版ステップの対照の一覧

Step1～14(Gendlin, 2004)	簡略式IAE(キャリア用)試行版 ステップ1～17
	ステップ1: フェルトセンスの説明。
	ステップ2: 深呼吸
	ステップ3: 将来、何になりたいと思うのか?
Step1: フェルトセンスから幾つか言葉を思い浮かべる。	ステップ4: イメージして、身体感覚を確かめて、身体で感じていることをできるだけ言葉にする。
	ステップ5: 将来の夢に関することで、身体に感じられることを言葉にする。
Step2: 言葉にしたフェルトセンスから一文を作り、そこから非論理的な部分を見つける。	ステップ6: 身体で感じられることを、一つの文にして表現する。
	ステップ7: ステップ6の一文から、自分にとって重要なキーワードをマークして、そこを空所にする。
Step3: 一文から重要に感じられるキーワードを取り除き、その部分を空所にする。その空所の部分に、何か別の言葉が当てはまらないかを捉え直す。言葉にしたいことが通常の言葉の意味では言い表せないことに気付く。	ステップ8: 空所にされたキーワード以外にも何か当てはまる言葉がないかと、フェルトセンスに再び注意を向けて、考える。
	ステップ9: フェルトセンスから表出された言葉の意味について考える。それらに対する辞書としての意味と比較して考える。フェルトセンスには独自の意味があることに気付く。
Step4: これらの語を使って、あなたが言わせたかったことを表現する文あるいは新鮮な語句を書く。	ステップ10: 表出された言葉や大切に感じられた言葉を見ながら、身体で感じていることを再び一つの文にして表現してみる。
step5: 各語に言わせたかったことを、言語学的には普通ではない新しい語句を書くことによって、再び展開する。	ステップ11: ステップ10で書かれた一文について、補足説明をしてもらう。
Step6: 側面(具体例)を集める。	ステップ12: フェルトセンスで感じたことがあるように思う経験を4つほど挙げる。
Step7: 各側面(具体例)が詳細な構造(パターン, シンボル)を与えるようにする。	ステップ13: 思い浮かんだ経験から、他の経験にも当てはまる一般的なパターンを見つける。
	ステップ14: 一つの経験から見つけたパターンを他の経験と交差させ、気づいたことを書く。
Step8: 各側面(具体例)を交差させる。	ステップ15: 交差してみて気づいたことを、3つ挙げてそれらを箇条書きにする。
	ステップ16: 交差で気づいたことを、短い一つの文で表現する。
Step9: 自由に書く。	ステップ17: いまの“身体の感じ”とあなたの将来の夢がどのように関係するか考える。思い浮かんだことをここで、エッセイ風にいまのその気持ちについて自由に書く。
Step10: 3つの用語を選び、それらを連結し、言葉にならない部分にも注目する。	
Step11: 各用語の間の本来的な関係を問う。	
Step12: 最終的な用語を選び、それらを相互に関係づける。	
Step13: 自分の理論を自分の分野の外に適用する。	
Step14: 自分の理論をその分野で展開し、応用する。	

第 12 章 簡略式 TAE(キャリア用) 試行版を用いた大学生のキャリア選択に関する研究
 - 進路未決定の大学生に対する実践事例の検討

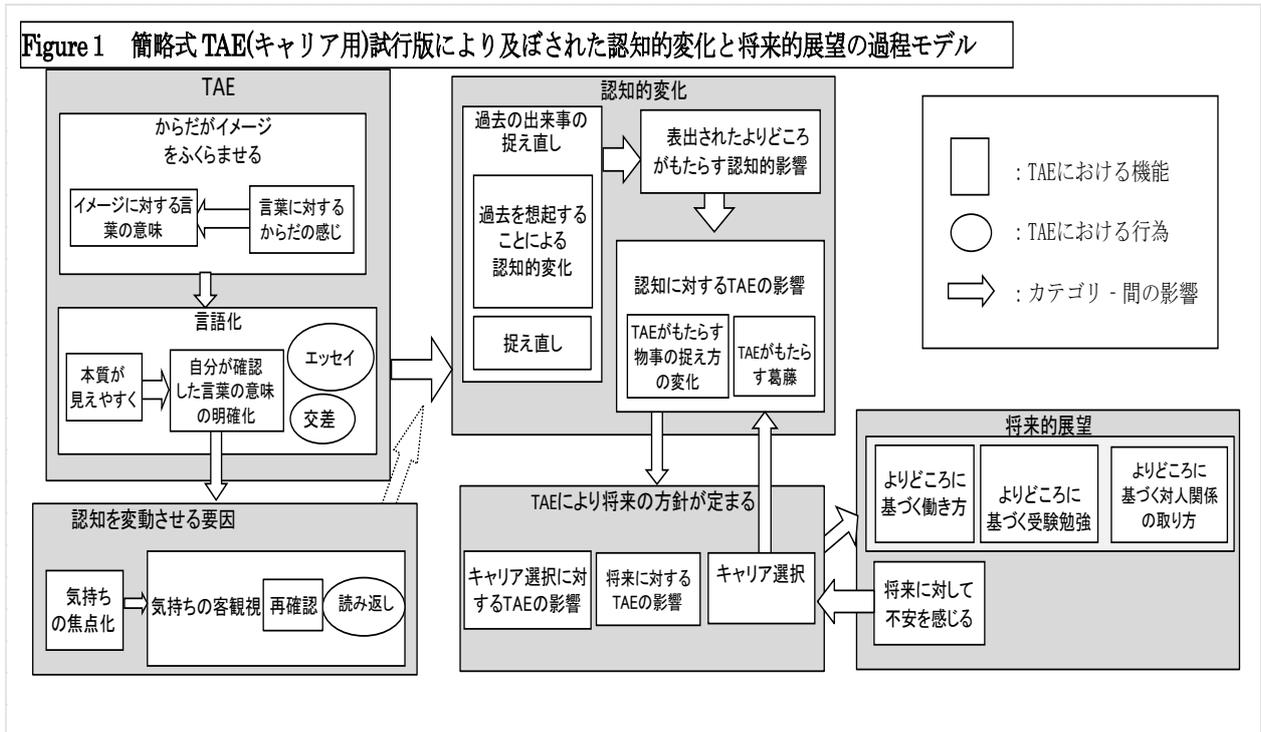
キャリア選択が未決定の傾向にある大学生(以下 TAE 実施者)7 名に対して、簡略式 TAE(キャリア用)の試行版によるセッションを実施し、それぞれの面接の逐語記録を詳細に検討した。面接の手続きとして、面接調査は 5 回行われた。1 回の面接時間は、90 から 120 分かった。その結果、簡略式 TAE(キャリア用)試行版は TAE 実施者のよりどころや価値観といった面にアプローチすることによって、そのキャリア選択を促すことが明らかとなった。

進路未決定の傾向にある TAE 実施者 7 名に対して、簡略式 TAE(キャリア用)試行版を行い、キャリア選択が促されていたかどうかについて、各々の実践事例を検討することによって調査した。その結果、簡略式 TAE(キャリア用)試行版は TAE 実施者のよりどころや価値観といった面にアプローチすることによって、TAE 実施者のキャリア選択を促すことを明らかとした。また、将来の夢に関するフェルトセンスと共に、過去の体験を捉え直すことで、少しずつ不安が軽減されるといった簡略式 TAE(キャリア用)試行版の効用を指摘している。

第 13 章 簡略式 TAE (キャリア用) 試行版が与える大学生の捉え直しの過程について
 - 質的研究による過程モデルの生成-

キャリア選択が未決定の傾向にある TAE 実施者 7 名を対象に簡略式 TAE (キャリア用) の試行版によるセッションを行い、その振り返りインタビューを実施した。なお TAE 実施者 7 名は第 12 章と同じ大学生である。振り返りインタビューの質的分析を行うことで、TAE 実施者がどのような体験をするのか、その過程を検討した。質的分析によって生成されたカテゴリー間の関係を Figure 1 のように示した。

Figure 1 簡略式 TAE(キャリア用)試行版により及ぼされた認知的变化と将来的展望の過程モデル



質的分析の結果、簡略式 TAE（キャリア用）試行版のセッションにおいて、TAE 実施者は自らのよりどころを明確にする過程において、自身の過去の体験を捉え直し、将来の方針を方向付けていることなどが明らかとなった。

TAE がキャリア選択において、どのような影響を与えているかについて、その過程について探る研究は見られていない。そこでキャリア選択が未決定の TAE 実施者 7 名を対象に簡略式 TAE（キャリア用）試行版を実施し、半構造化面接による振り返りインタビューをすることで、探索的に質的研究による調査を行った。その結果 TAE を行うことは、自分自身のよりどころを明確にさせ、キャリア選択を促す。またそのよりどころを明らかにする上で、過去の体験の捉え直し、将来の方針を方向づけるという過程が明らかとなった。

簡略式 TAE（キャリア用）試行版によって構築されたよりどころが、例えば就職活動での困難や職場の人間関係の厳しさといった社会的な困難にぶつかったとしても、それに立ち向かうための基盤となる価値観になると考えられた。またそうした価値観は、簡略式 TAE（キャリア用）試行版における交差が繰り返されることにより成り立つと考えられた。

第 V 部 総括

第 14 章 総合的考察

第 14 章では総合的考察として次の 3 点が明らかとなった。

(1) 第Ⅲ部第 7 章、第Ⅳ部第 11 章において、簡略式 TAE（自己探索用）及び簡略式 TAE（キャリア用）試行版を作成した結果、簡略式 TAE（自己探索用・キャリア用）試行版の TAE の容易な実施、汎用性、普及の 3 つの利点が明らかとなった。

容易な実施として、簡略式 TAE を開発したことで比較的短時間で TAE を実施することが可能になったことが挙げられる。

次に汎用性としては、TAE の活用を考える際の選択肢の幅を拓けることにつながったことが挙げられる。これまで TAE を活用するとしたら、理論を作ることが挙げられていたが、簡略式 TAE を作成し自己探索やキャリア選択に活用することを検討することで、理論構築以外の目的に TAE を活用する可能性が示唆された。

また普及の点として、本研究において簡略式 TAE（自己探索用・キャリア用）試行版を開発し実施したという実例を示すことができたことにより、Gendlin のオリジナル TAE を簡略的に用いる TAE 実施者を今後、増やしていくことにもつながると考えられる。

(2) 簡略式 TAE（自己探索用・キャリア用）試行版の有効性を検討するために、第Ⅲ部第 8、9、10 章、第Ⅳ部第 12、13 章において、TAE セッションにおける TAE 実施者の体験を明らかとした。具体的には簡略式 TAE（自己探索用・キャリア用）試行版を用いることで、思考が行き詰る中で、自分自身の考えがこれで良かったのかとわだかまりを感じるようになる。これが自明性の揺らぎであるが、自明性の揺らぎが生じる中で新たな固有な言葉や文を見出すことで、認識の拓がりが生じることが明らかとなった。例えば A は、『誠実という殻を剥ぎ取る』という一文を見出すことで、これまでとは違った誠実さを見つめるようになったと考

えられる。このように認識の拡がりが生じることが明らかとなった。

その結果、簡略版 TAE(自己探索用・キャリア用)試行版において思考が行き詰る中で、自明性の揺らぎが生じるが、新たな固有な言葉や文を見出すことで、認識の拡がりが生じることが明らかとなった。

(3) 第3部第9章、10章において TAE セッションのガイドの在り方の検討を行った。その結果、ガイドの『思考を深める取り組み』が、『自分の限界を知る』ことや、【自明性の揺らぎ】を生じさせるが、その際にはガイドが『積極的に聴く』ことや、『ガイドから働きかけられる』ことが必要であることが明らかとなった。

第15章 本研究の課題と展望

第15章では本研究の今後の課題と展望として次の3点を示した。

(1) 第11章では5名、第14章では7名の TAE 実施者を対象に簡略式 TAE(自己探索用・キャリア用)試行版を実施するに留まっており、また第9章から第11章における簡略式 TAE(自己探索用)の試行版を用いたセッションの対象者は倫理上の配慮からいずれも知人に限定したが、そのことがセッションに大きな影響を与えていると考えられる。このことから今後は、知人以外の人を対象にセッションを積み重ねていき、少なくとも数十のセッションについての質的分析を行う必要がある。

(2) 本研究では量的検討をおこなっていないことから、簡略式 TAE(自己探索用・キャリア用)試行版のセッションの効果に関して EXP スケール他を用いた量的研究をおこなう必要がある。

(3) 本研究では臨床群に1回も適用していないことから臨床群への適用とその事例の検討が必要である。

これらの課題に取り組むことで、簡略式 TAE(自己探索用・キャリア用)試行版の改訂を続け、簡略式 TAE(自己探索用・キャリア用)の開発に努めていきたい。

引用文献

Gendlin, E. T. (1962). *Experiencing and the creation of meaning : a philosophical and psychological approach to the subjective.* Free Press of Glencoe.

(筒井健雄 (訳) (1993). 体験過程と意味の創造 ブック東京)

Gendlin, E. T. (1964). *A Theory of personality change.* In P. Worchel & D. Byrne (Eds.), *Personality change.* (pp.100-148). New York: John Wiley.

(ジェンドリン, E. T. 池見陽・村瀬孝雄(訳) (1999). セラピープロセスの小さな一歩——フォーカシングからの人間理解—— 金剛出版)

Gendlin, E. T. (2004a). *What is TAE? Introduction to Thinking at the Edge.* The Folio, 19, 1-8.

(村里忠之ら(訳) (2004). 「TAE(辺縁で考える)」への序文)

Gendlin, E. T. (2004b). *TAE steps.* The Folio, 19, 12-24.

- (村里忠之(訳)(2004). 辺縁で考える (TAE)のステップ)
- (得丸智子(訳)(2010). ステップ式質的研究法——TAEの理論—— 海鳴社)
- Glaser, B., & Strauss A. (1967). The Discovery of Grounded Theory Strategies for Qualitative Research. Chicago : Aldine.
- (後藤隆・大出春江・水野節夫(訳)(1996). データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすのか—— 新曜社)
- 三沢元彦(2019). 質的研究法 TAE を用いた面接が新任教師の生徒指導上の気づきと行動を促す事例 学校メンタルヘルス, 22, (2), 220 - 230.
- 村里忠之(2005). 「TAE : Thinking At the Edge(近縁で考える)」あるいは「未だ言葉の欠けるところ Wo noch Worte fehlen」伊藤義美(監修)フォーカシングの展開 (pp. 33-47) ナカニシヤ出版
- Proß Evelyn(2012b). Der Belastung eine Sprache geben - Ein (Er)Lebens-Prozess zur Stress bewältigung. Gesprächspsychotherapie und Personzentrierte Beratung, 1/12, 10-20.
- Smith, J. A.(1995) . Semi-Structured Interviewing and Qualitative Analysis. In Smith, J. A. Harre, R., & van Langenhove, L. (Eds.) Rethinking Methods in Psychology. (pp. 9-26). London:Sage.
- Smith, J. A., & Osborn, M. (2008). Interpretive phenomenological analysis. In Smith, J. A. Qualitative Psychology : A Practical guide to Research Methods (pp. 53-80). Sage Publications.
- Strauss, A. & Corbin, J. (1998). Basics of Qualitative Research : Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory (2nd Ed). Sage Publications.
- (操華子・森岡崇(訳)(2004). 質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順—— (第2版) 医学書院)
- 得丸さと子(2010). ステップ式質的研究法 - TAE の理論と応用 - 海鳴社
- 得丸智子(2016). 11章 TAE の研究事例 TAE ステップによる内省プロセスの可視化の試み 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之 (編著)「主観性を科学化する」質的研究法入門 (pp. 132-164) 金子書房
- 得丸智子(2020). 3パートTAE (Thinking at the Edge) と ウェブサイト「TAE リフレクション」開智国際大学紀要 19 (0), 167-175.